
その少女の行く道は

空木 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その少女の行く道は

【Nコード】

N4258X

【作者名】

空木 玲

【あらすじ】

奈緒という少女の物語。

日暮れ

赤く燃えた太陽が、騒めく木々の海に沈んでいく。

奈緒はその様子を無感動に見届けていた。

ジリジリと緑を焼き尽くすように下降する光は、身を潜めるように消えていき、その対面では、燃え盛る火を消そうと暗い青が空を覆い始める。

少しずつ、着実に、世界が暗い色に染まっていく。

移りゆく天に対して、奈緒は1ミリも動かない。

そして沈みゆく赤が空から消え、その空間全てが暗く包まれたとき、初めて奈緒が動いた。

息を身体の奥深くから押し出し、それから後ろを振り返る。

その先に誰かいる訳もなく——むしろ生き物の気配など全くせず、ただ沈黙の闇が佇んでいるのみであった。

しかし奈緒は唐突に話し始めた。

「夕日は、つまらないね」

目の前に広がる空間に声を掛ける。

もちろん、返事など帰ってくるはずもない。

「ただ明るい球体が地面に埋まっていくだけだもの」

奈緒は続けた。

「じゃあなぜ、人間は夕日を見て感動などするの？綺麗などと思うの？」

それは誰かに話し掛けているようでいて、しかし独り言のようにも聞こえた。

「なぜ？」

否、始めから何にも話し掛けてはおらず、ただ独り言を言っているだけだったのかもしれない。

「この世界はこんなにも汚いのに」

けれども、たとえそうだとしてもやはり奈緒は誰かに話し掛けるよ

うに語っている。

「だからこの世界に在るもの——落ちていく夕日も、人間も汚いの」

世界はもうすでに完全な暗闇に閉じ込められている。
全てが暗く一つになっているような感覚に陥る。

「どうして綺麗だと感じる事ができるの？」

奈緒は暗闇の中、独りで話し続ける。

「綺麗なものなど一つも無いのに、だから感動も、綺麗だと思う気持ちも無いはずでしょう？汚いものを見ても、感動なんてしないし、綺麗などとは感じないもの。けれど人間は汚い夕日を見て、感動して、綺麗だと感じる。」

奈緒の声だけが闇にこだまする。「どうして？なぜ、そんなことを感じるの？」

奈緒の言葉が止まり、静寂が広まった。

時間が止まる。否、そう感じるだけ。

そして、小さな風が起こった。

木々を鳴かせながら、奈緒を通り抜けていく。

冷たいような、暖かいような、そんな風が走り、そして消えていった。

再び滲みだす、静寂。

「もう、分かんないよ」

それからそれを破る一つの音。

奈緒が発した声。

辺りは黒一色に塗り潰されており、何も見えない。

舞い戻る沈黙。

静寂が闇に染み込み、冷たさを増す。

けれどもその冷たい闇に浸る者の姿はすでに無く、そこにはただ哀しい夜の闇が満ちているだけだった。

夜

黒い黒い闇夜が訪れていた。

天を見上げて、地上を仄かに照らす月はなく、暗い渦がのっぺりと広がっているだけであつた。

幾重にも重なつた深い深い夜の闇。

その下に、小さな野原が闇に隠されていた。

森の中にぽつかりと空いた小さな空間。

そこに存在するもの全てが闇に溶けるように輪郭を失い、ぼやけて映る。

深い闇が支配する世界。

全ての色を溶かして混ぜたような闇が、どこまでも広がっている。

世界は一色で作られ、静寂が重く腰を下ろしている。

その静寂を破るものはいない。

風も恐れをなしてか、吹くことを忘れている。

虚無の静寂。

長い沈黙の音が響き、そしてその静けさを纏うように一つの生命が現れた。

闇に掻き消されそうなほどの、小さな生命。

闇に潜む大きな存在。

それは音を生み出すもの。

生み出せるもの。

けれども音は響かない。

地を踏みつけて確かに歩を進めているのにも関わらず、生まれるのは静寂。音はない。ただその者の周りの空気が揺れるだけ。

消えそうな、確かな存在。

生命にあるはずの音が聞こえない。

静寂は立ち去らない。

地を踏む足の動きが止まつた。

変わらずの無音。

その人影は闇を見つめるだけ。
全てを覆い隠す闇に、その存在が消されていく。隠されていく。
闇に、呑み込まれていく。

けれども影は動かない。闇を眺めている。

そしてその者――奈緒は闇を拒絶するように、音を発した。

「何も、見えないのね」

静寂に亀裂が走り、崩れ始めた。

闇は奈緒の周りで揺れ動く。

「それとも何も無いの？」

静寂が粉々に崩れ、眩きが闇に轟く。

奈緒以外は沈黙を守ったまま、ただそこに在り続ける。

「何も無いのも、何も見えないのも同じだね」

闇に奈緒の声が混ざっていく。

「何も無ければ見えるはずもないし、何も見えなければ何も無いのと同じこと」

奈緒は黒に隠れ、まるで闇が声を発しているかのように感じる。

否、奈緒が闇に話し掛けているのかもしれない。

けれどもこれはただの奈緒の眩き。

「ここに存在したものに、価値はない」

無感情な声だけが響く。

「だから無くてもいいよね。無いほうがいい」

空気が柔らかに揺れる。風が吹いた。

「なぜこんなに無駄なものが多いの？」

悲しげに寂しげに風が木々をそつと撫で、奈緒を包み込んだ。
優しい抱擁。

奈緒の声が止まる。沈黙が降りた。

再び静寂が現れる。

声は、無い。

風は闇に溶け、黙り込む。

動く気配も、音が紡がれる気配もしない。

長い長い時が、閑静と流れる。

いつの間にか、奈緒は闇の中から消えていた。

生命の気配はもうしない。

そこにはただ、全てを隠す闇と、それに隠された木々や愛らしい花々だけが残されていた。

夢

ドクン、ドクン。

心臓がうるさい。

ドクン、ドクン。

何かを拒むように、胸の鼓動は続く。

ドクン、ドクン。

ドクン、ドクン。

——……お、なお

誰かが自分を呼んでいる。

知っている声。

大切な、声。

ドクン、ドクン。

——奈緒

拒絶する。これ以上聞くなと。聞いてはいけない、と。

ドクン、ドクン。

——奈緒……

心臓の打つ音が、耳を塞ぐように大きくなっていく。

けれどもその暖かく悲しい声は頭の中にこだまし、どれほど拒んでも聞こえてくる。

ドクン、ドクン。

ドクン、ドクン。

ドクン、ドクン。

——奈緒……

ドクン、ドクン。

——ごめんね

ドクン……。

心臓の音が遠退き、視界がわずかに明るくなった。
見覚えのある、光景。

自分と、自分の手を引く誰か。

……どこにいくの？

——秘密！もうちょっとで着くよ

うん……

——寝ちゃダメだからね？

うん……

——もう……

——あ、ほら。着いたよ！

……わ

——ナイスタイミング

——眩しいねー

まぶしい……

——目、閉じてみて。いいから、ほら

——どう？

あかい……

——そうね。それに暖かいでしょ？

ちよつとさむい

——そう？暖かいよ

——体がね、光に包まれて、柔らかいベットで寝ているような気持ちになるの。分からない？

うん

——そつか。きつと、そのうち分かるよ

わかんないよ

——大丈夫。分かるから

そつかな……

——うん。きつと

微かな笑い声が空気を揺らした。

視界が真っ白に染まり、次の瞬間には空が透けた青に変わっていた。眩しい光の下、森の中の開けた場所に先ほどと同じ二人がいる。髪の毛の長い少女とその少女の腰辺りまでしかない小さな少女。

——ほらあそこ！

……あ

——かわいいでしょ？

うん。かわいい、おはな

——誰にも教えてない秘密の場所なの

——でも奈緒にだけは教えただげる

いいの？

——もちろん！この場所は大切なところで、奈緒も大切な存在。

——だからね、知っていてほしいの

……そう

——大切にしてくね

うん

——よかった

安心したように、柔らかく笑った。

白い光が燃えるような赤に変わる。少女が二人、手をつないでいた。
——ほら、奈緒！見てごらん

……？

——夕日よ。きれいでしょ？

きれい？

——そう。とってもきれい

——太陽が明日を迎えるために沈んでいくのよ

あした？

——明日。太陽が沈んで、夜が訪れて、それからまた太陽が昇ってくるの。そして明日が始まるのよ

——素敵なことでしょ？

わかんない

——そっか。でも、赤く染まる空はきれいでしょ？

……うん。きれい

——ね？そうでしょ

見上げた先で、誰かが優しい顔をした。

燃える赤と流れる青と輝く白が混じる。
視界がぐるりと回り、闇に落ちた。

光が見えた気がした。

夜明け

肌に凍みいる闇が全てを覆い隠す世界。

ずしりと構える小高い丘も、遙かまで広がる建物も、それを眺める人影さえも、渦巻く闇に包まれている。

永遠に続く暗黒は途切れることを知らず、どこまでも広がりゆく。そんな闇の中で、奈緒はその暗がりに溶け込むように立っていた。黒塗りの丘に立ち、見えるはずのないちっぽけな建物の群れに向かっていた。

それはまるでその時を待っているようで。

その時を憎むようで。

あらゆる感情に濡れた無感情な瞳を一心に向けていた。

永遠の闇の時間を、漂っていた。

そして、夜を統べる黒き王者が悲鳴を上げる。

全ての色を食らいつくす黒が白み、隠された色が徐々に溢れはじめた。

闇に沈んでいた緑の丘や身を寄せ合った家々、そして立ち尽くす人までもが姿を現し、本来の色に戻っていく。

永遠の闇が王座から退き、永遠が一瞬に変わった。

沈殿していた黒が透け、淡い青に変わり、白が混じり、輝く色がそれを優しく包み込む。

花が開くように、幼鳥が羽ばたきの時を迎えるように、光が闇を打ち払い、広がり、世界を染めた。

光が世界を統べるとき。

闇が挫かれた。

奈緒はその瞬間を見届けていた。

無感動に、無感情に。

「やっぱり、寒いよ」

そして、呟かれた言葉。

哀しく寂しい音の響き。

光の輝きが柔らかにその声を包み込む。

しかしその抱擁から逃れるように、虚しい音が口から零れ落ちた。
「姉さん」

透けた光が、その小さな体を抱き締めていた。

朝

太陽はすっかり地上から身を起こし、まばゆい光を辺りに撒き散らしていた。光を受けたものは自らの影を作り、不敵に佇む。

そんな中で、奈緒はただぼんやりと立っていた。今にも消えそうな不確かな存在。

その前に広がる輝かしい朝の景色。

奈緒はその光景を、瞼を下ろすことで閉ざした。何かを耐えるように、何かから守るように目を閉じたまま動かない。

光は奈緒にも同じように注がれ、奈緒の後ろには深い深い影ができている。

そうしていくばくか経った後、奈緒は緩やかに瞼を上げた。光の源を見ぬよう視線を下ろしたまま、後ろを振り返る。

「あれ、自殺じゃなかったんだ」

途端に聞こえた声。おそらく少女のものであるう可愛らしい音。

その声は奈緒が振り返った先——光を受け、大きな闇を作り出す雑木林の中から響いてきたようだった。

奈緒は思わず顔を上げ、静かに周りを見渡す。

そこに在るのは光り輝く木々とそれから生まれた陰のみ。音を繰り出す者は見当たらない。

奈緒は再び黄金色に輝く地を見下ろし、ゆっくりと足を踏み出した。音も無く歩みを進め、闇のはびこる雑木林の中へと入っていく。

奈緒を抱くように傍で見守っていた光は離れていき、その代わりと言つかのように、木々の裏側にできた冷たい闇が奈緒の周りで揺らめいた。

「あー、ちょっと待って」

木々の陰を数歩踏みしめたところで、奈緒の頭上から再び声が聞こえた。少し慌てたような、先ほどと同じ声。

立ち止まり、ずっしりと構えた木々を見上げる。体を回しながら、

不信な声の出所を探す。

けれどもお互い身を寄せ合う緑の葉達の隙間からはわずかに切り取られた空が垣間見えているだけで、他のものはない。

諦めたように顔を下げた。

するとがさがさと不自然に木の葉が擦れ合う音がして、それからよつ、と軽い声が上がった。

視界の右端に、上方から降ってきた何かを捕らえる。

それは木を揺らし、長い髪を踊らせながら地面に着地した。

奈緒はその落ちてきた長髪の影が佇む方を向き、少し訝しむように眺めた。

「へー、地面つてやらかいんだね。飛び降りたらちよつと痛いかなって思っただけど、わりとそうでもないや」

それは驚き感心したような声色で言葉を紡ぐ。

その声は奈緒に投げ掛けられたようだったけれども、奈緒自身はそれに関心せず、ただ音の発信源を見つめ続ける。

「ね、さっき何してたの？ものすつごく暗かったからさ、あたし自殺かと思っただけど」

痛いほどに明るい光を背に負い、独り言のように問い続ける。

「違ったか？それとも正解？図星？」

その表情は、光の裏にできた影に遮られ、分からない。

「あー、あそこ意外と高いしね。怖気付いちゃったとか？」

明らかに奈緒に向かって尋ねている言葉に、奈緒は無反応を押し通す。その声が届いているのかさえ怪しい。

「んー、まあ怖気付いても付かなくても、そんな変わんないけどね。飛び降りようが、どうしようが、結果は一緒。うん？いや、ちよつとは変わるかも。分かんないや」

けらけらと笑い声上がり、それと連動するように長い光り輝く髪が愉快げに揺らめく。

相変わらず、顔は影に黒く塗り潰され分からない。

奈緒は静寂を纏ったまま、その様子を観察するように眺めている。

その視線に気付いているのかいないのか、輝きを纏うその少女はその場から動くことなく、奔放に振る舞っている。

けれども闇の仮面を付けたその人影は、虚無をその身に宿しているようにも感じられた。

「あ、そういえばさ、名前何ていうの？あたしはね、えっと、あー、うん」

そうは言っても、やはり少女の声は明るい。

それはまるでその空白を覆い隠すかのようで。

闇に取り込まれそうになる体を掻き抱くようで。

「そう、幹。幹って呼んで。可愛いでしょ？」

少女の高い声は闇に、光に響きゆく。

奈緒はその音響に耳を傾け、黒塗りの少女の表情を伺おうと、じっと見つめ続ける。

問い掛けには、応じない。

「君は、何て呼べばいい？」

反応を示さない奈緒を特に気にした風もなく、幹と名乗った少女は変わらない明るさで話し掛けた。

奈緒は口さえ開かない。

やがて明るい声が萎むように消えていき、そして奈緒の纏った静寂が膨らんだ。静寂が、この世界を占める。

闇は蠢き、光はその闇を突き刺し煌めく。

「……奈緒」

いくばくかの無音の後、漸く奈緒は口を開いた。

それは小さく籠もった声でありながらも、確かな存在感をもって静寂に染み込んだ。

「ふーん、ナオか。うん、可愛いね」

暗い声で呟いた奈緒を気にも留めず、幹はけらけらと笑った。

奈緒は自らの縄張りを張る猫のように、その様子を見つめる。

そしてその視線を幹の代わりに受けた空っぱの笑いは、虚しさを残して次第に消えていった。

光の裏にできた深い闇は静寂に満ち、もしそこだけ取り出したならそれはまるで哀しい夜のようであった。

「……ね、ナオ」

幹が呟くように、囁くように奈緒を呼んだ。それは先ほどまでとは違い、優しい哀しい声だった。全く別人のような、しかし彼女に相応しいそんな音だった。

「ナオはさ、何を思ってたの？」

真直ぐに闇を突き通る視線が奈緒に向けられた。

「太陽が、昇ってくるところを。何を感じた？」

静かな時間が流れる。

奈緒は口をほんの少し開き、沈黙していた。

「あたしはね」

顔が伏せられ、幹の髪が流れるように動く。

「あったかそうだなあって。きつとあったかいんだろうなって」

ゆっくりと、顔が起こされる。幹は奈緒を見つめ、奈緒は幹を眺めた。

「そう思ったよ」

優しい音が闇の中を彷徨い、空気を揺らし、奈緒の許に辿り着くと静かに消えていった。

奈緒の開いていた口が閉じ、そしてまた開かれた。唇が心細げに震えている。

わずかな躊躇いと、絶るような哀しい想いが奈緒を満たした。

そして——奈緒の声が零れ、小さな夜に流れ始めた。

「……夢を、夢を見ていたの。あの光に。あの時の夢。大切な、夢」

静かな音が光の裏側を揺らし、溶けていく。

寂しい響きが暗闇に籠もり、消えていく。

幹はその声に耳を傾け、光を背負うその身でそれを受けとめる。

「それから、探していたの。夢と違うところを」

奈緒はもう幹から目を逸らし、暗い地面を睨み付けていた。

「姉さんが感じた太陽の暖かさを」

その姿は迷子になった幼い子供のように孤独だった。

迎えに来てくれる誰かを、待っているようだった。

「分かんないよ……。なんで、なんで」

——分かんないの。

涙のような言葉が陰を震わせる。

泣いているような音が、幹の耳に届く。

そっと、幹が木の陰に入っていた。幹の背中から光の羽根が削ぎ落とされる。

静かに闇を押し退けながら、ゆっくりと奈緒に近付いていく。

奈緒は顔を下に向けており、それには気付かない。

一步、一步と、奈緒との距離が縮んでいく。

幹の髪が滑らかに踊る。

そして幹が手を伸ばせば触れられるほどの間を空けて、立ち止まった。

沈黙が、二人の間に流れる。

奈緒は、幹がすぐ目の前にいることに気が付いていないはずはないのに、深く押し黙ったままだった。

じわりと広がっていく暗い沈黙。

長いようで短い静寂が辺りを満たした頃、俯く奈緒の右手に白い何かが伸ばされた。

それはそのまま奈緒の手首を掴む。

白い幹の右手だった。

幹は奈緒に背を向け、足早に陰の中を歩いた。奈緒の手首を強く優しく握ったまま。

奈緒は伏せていた顔を上げ、先行く幹の背中を見つめた。

長い黒髪が、空を舞う鳥の翼のようにふわりと広がっている。

二人は沈黙したまま歩く。

少しずつ、視界に入る闇が減っていき、光が強くなっていく。

奈緒は再び視線を下げた。光を拒むように。

けれどもそうするだけで、奈緒は幹の手を振りほどこうとはしない。

二人の姿が、白い光に包まれた。
柔らかな優しい輝き。

その光を恐れるように奈緒の歩みが鈍った。
しかし幹はそれに構わず、ただ奈緒を掴む右手に力を込めたただけだった。

二人の周りを、陽光が踊るように駆けていく。
朝の澄んだ空気が世界を包んでいる。

幹が立ち止まった。自然と奈緒も歩みを止める。

奈緒は依然、下を向いたまま。

幹の後ろでそうしている姿は、まるで日から逃げているようだった。
幹は後ろに潜む奈緒を一瞥すると、強く手を引いた。

操り人形のように弱々しく、奈緒は幹の隣に並ぶ。
深い沈黙。

「……ね、ナオ。見てみなよ」

それを溶かすように、ぽつりと呟いた。

幹は朝日の眩しさに、わずかに目を細めている。

奈緒は顔を伏せたまま、沈黙を守る。

「ほら、ナオ」

そう言いながら、幹は奈緒を掴んでいた右手を離し、そしてもう一度握り締めた。――今度は手首ではなく、奈緒の手のひらを。

強張るように奈緒の肩が揺れ、握られた手がわずかに竦む。

その動きを手のひらに感じ、幹はただ静かにその不安げな手を柔らかく握った。

それから幹は、見守るように奈緒を見つめた。

揺れ動く沈黙。

目映い朝の輝きが二人を包む。それは雛鳥を愛しむ親鳥の真っ白な翼のように、二つのほんの小さな生命を抱いていた。

そして――守られた雛鳥が親鳥の羽の隙間から、世界を覗いた。

奈緒の視界に広がったのは、何の変哲もない朝の風景だった。

光に照らされた見慣れた家々。嬉しそうに朝日を味わう艶やかな色

をした木々や草花。朝の喜びを祝福する鳥達や主人の目覚めを退屈そうに待つ犬達、早速二度寝を始める猫達。変わらぬ始まりの景色。

何度も繰り返されてきた時間。

ただ、ただそれだけ。

奈緒はあの拒んでいた優しい光を一身に受け、その逃げてきた光景を目に写し、立ち尽くした。

当たり前の世界を、眺めた。

いつの間にか、きつく左手を握り締めていた。

「ね、ナオ。わかった？お姉さんの感じたモノ」

少女の声が尋ねてきた。

「……分かんない、でも」

奈緒はきゅっと左手に力を込めた。

目覚めを促すように、鳥が朝の囀りを奏でていた。

——さて、じゃあ帰ろっか

……

——うん？どうしたの、奈緒

きらきら、してる

——そうね。きれいでしょ？

うん

——これがね、始まりなんだよ

——さ、帰ろっ？皆が起きる前に

……うん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4258x/>

その少女の行く道は

2011年10月21日00時59分発行